

申請者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	杉村寛子 印
調査研究課題	英米短編小説を題材とする interactive e-books 開発のための基礎研究					
交付決定額	200,000 円					
調査研究組織	氏名	所属・職	専門分野	役割分担		
	代表	杉村寛子	保健福祉学部 看護学科教授	19世紀イギリス小説	作品の文体分析／文献渉猟 ／コンテンツ開発	
	分担	星野裕子 (9月退職)	保健福祉学部 保健福祉学科教授	語学教育, 文化間コ ミュニケーション	文学教育関連学会の学習会 参加／教材検討	
	者代表	藤本宏美	岡山県立大学 非常勤講師	スポーツ工学, 経営 工学	システム開発実装/ 学会発表	
調査研究実績 の概要	<p>本研究は、文学作品が教養力の一つ <u>critical thinking</u> 能力を高めるために適した教材となりうると仮定しスタートした数年にわたる継続的な研究である。</p> <p>今年度も以下のように2分野の研究を交差させる形で行われた。</p> <p>(1) コンテンツとなる文学作品の研究および文学教育の方法論の文献研究</p> <p>(2) それを実装する情報工学関連の研究 (前者は代表の杉村、後者については共同研究者の藤本宏美の担当)</p> <p>(1) 文学研究と文学教育研究</p> <p><u>文学研究</u> ‘A Painful Case’ (James Joyce) の文体論分析 (stylistic analysis)</p> <p>文体分析ではcontentとform (内容と形式) の整合性も課題となるが、本研究においては、話法 (mode of speech) の変化を文体的特徴と見なし、それが主人公の心理の変化を表現するために巧みに用いられていることを明らかにした。</p> <p>(本研究の成果は、8月にHeidelbergで開催されたPALA2013にて発表)</p> <p><u>概要</u></p> <p>感情に左右されない主人公の冷静な態度を表現するために、作品前半ではdirect speech、free direct speechやfree indirect speech、narrative report of action (単に出来事を三人称の語り手の声で語る方法) を用い、主人公の感情を描くことが避けてられている。しか</p>					

<p>調査研究実績 の概要</p>	<p>し、後半ではdirect thought、free direct thought、free indirect thoughtを用い、主人公の感情を描き出す方に話法が急に変化している。このような話法の劇的転換によって、主人公の押し殺してきた感情を露にする効果ははかられていることが明らかとなった。教育的効果としては、話法がコミュニケーションにおいてどのようなニュアンスを持つものかを学習者に理解させ、書く際に応用させることができる。また話法の変化を文学作品を読む際の科学的な分析の項目として習得させることにより、作品をクリティカルに読む姿勢を構築させることができる。</p> <p>文学教育研究 Amos Paranのreview論文のreferencesを基に文学教育に関する論文を渉猟。</p> <p>1) Cook, Lenora, 'What Is a Regular English Classroom? Language and Cultural Diversity in Today's Class'.</p> <p>(「読む」ことへ学習者を向かわせる際に、教員がその動機づけに関わらないと、学習者は興味関心を持っていたとしても、自主的に読む行為を行うとは限らない。ここでの教員の役割はfacilitatorであり、文学作品を扱う際に教員は権威者として解釈や分析を教えるのではなく、'scaffold'を与えるべきである)</p> <p>2) Horowitz, Daniel. 'Fiction and Nonfiction in the ESL/EFL Classroom: Does the Difference Make a Difference?'</p> <p>(educationがtrainingかという教育における目標を考えた場合、文学作品はスキルを教授するtrainingではなく、creative writingにつながる創造力や文章をクリティカルに読む能力を涵養するeducationに適した教材だと説く)</p> <p>3) Yang, Anson, 'Reading and the non-academic learner: a mystery solved'</p> <p>(社会人学生を対象とする授業で、Agatha Christieのミステリー小説を教材とした授業の実践報告。単に、読み、文法の問題などに答えるよりも、読後のグループ(クラス)でのディスカッションを伴う授業の方が、読むことへの動機づけを強め、学習成果が明らかであった)</p> <p>(2) 電子書籍システムに基づくアプリ開発 課題の明確化 紙媒体から電子媒体による書籍の移行には、</p> <p>1) 読者の書物への物理的・心理的アクセスの向上 2) 書物を通じた読者間のインタラクションを可能にするネットシステムの構築</p> <p>など広がりを見せ、期待も高い。しかし、一方で書籍販売のためのツールとしての機能が先行し、電子書籍ならではの特徴を活かした利用が十分であるとは言い難い現状も指摘されている(『特集 電子書籍の未来: 情報処理』岡本真編 情報処理学会, Vol.53, No.12, pp.1254-1286 (2012).)。</p> <p>今後の研究の方向性を定めるテーマ「電子書籍システムを教育に特化した形で活用する方法の検討」に行き着いた。</p> <p>1) 文学作品を教材とする際、学生から期待されている教員の役割が権威的な解釈や分析を与えてくれる存在であること 2) 文学作品の解釈・分析に関しては、学生の中で「正しい」「間違い」という認識が根強くあり、自己の解釈・分析に必要なのは、権威的な存在ではなく、自己の論理性やクリティカルな思考力にあることに気づいていないこと</p> <p>以上の2点から、文学作品を論じる際に教員のいない空間(またpeerにおいても優劣の差を感じず、自由に意見を述べることができる匿名空間)が必要であり、そのために電子書籍システムを活用した、学生主導の議論が可能となるシステムの構築の必要性が見えてきた。</p> <p>アプリ開発 既存の電子書籍システムですでに実装されているメモ・コメント機能をiPhone端末で利用できる形で実装を試みた。PCブラウザベースでの電子書籍システムよりも書籍にふれる機会accessibilityを高めることで、活用の場を広げることができる。iPadなどのタブレット端末にも応用可能であるが、これらのデバイスの短所としてPCより画面サイズが小さくことが挙げられ、より利便性を考えると書き込み機能に工夫が必要であり、改良の余地がまだ残されている。本研究で開発したアプリについては、来年度の「計測自動制御学会中国支部大会」もしくは「日本経営工学会」で口頭発表を予定している。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>1) 'An Analysis of the Narrator in 'A Painful Case'' <i>PALA 2013 Proceedings Online</i> 2013.11.</p>

